

蘇るリットン・ストレイチー

——フロレンス・ナイティンゲールと求婚者(二)——

中原 章 雄

一 最近のフロレンス・ナイティンゲール研究をめぐって

リットン・ストレイチーは一九一八年出版の『ヴィクトリア朝の偉人たち』で、四人の人物、すなわち、マニング枢機卿、フロレンス・ナイティンゲール、アーノルド博士、ゴードン將軍を論じた。^①

ナイティンゲールは、四人のうち今日では格段に著名な人物であり、研究者からも注目度が高いヴィクトリア朝人であった(言うまでもなく、ナイティンゲールに比べると、昨年筆者が論じたゴードン將軍は、知名度において比較にならない人物でしかなかった)。

ナイティンゲールに関する最近の研究動向において、伝記的な領域で特筆すべきものとして、ジリアン・ギルによる、フロレンスと両親・姉妹との関係を詳細に描いた伝記があり、本稿執筆中も依拠する点が多かった。^②

しかしながら、何より重要なのは、今世紀初頭から刊行を開始した全一六巻が予定されている著作集(ウィルフリッド・ローリエ大学出版部)であろう。^③

これは、ナイティンゲールの最初の著作集であり、看護・医学関係の分野から信仰の領域をも含む大規模な内容が網羅されることになっていく。筆者の関心は専らリットン・ストレイチーの著作におけるナイティンゲールに限定されていて、本来なら、彼女の信仰生活にも及ぶ壮大な

著作集は、本稿では題名を挙げるにとどめることが、むしろ妥当であるかもしれない。

ところが、この著作集には無視できない問題がある。著作集の第一巻(二〇〇一年刊)は、略伝と書簡集から成っているが、その巻頭言の冒頭で、編集者リン・マクドナルドはこれまでの龐大なナイティンゲールの研究文献のなから、とくにストレイチーに注目し言及しているのである。^④

マクドナルドは、ストレイチーのナイティンゲール論を、彼女に関する伝記的著作が、初期の追従的な傾向から、攻撃的な色彩へと変化する転換点と位置づけ、「不敬で気まぐれなエッセイ」と呼んでいるのである。

『ヴィクトリア朝の偉人たち』は刊行当時から高い評価を得る一方で、激しい批判をも誘発してきた。したがって、こうした評価自体はそれほど不思議ではない。しかしながら、この伝記は、すでに出版から約一〇〇年が経過し、いまではイギリス伝記文学のなかでも有数の古典的名著である。学術的な装いをこらした著作集の冒頭で、いきなり露骨な敵意の対象となるのは、「不敬」という、いささか時代錯誤的な形容による高圧的な断定とともに、奇異な現象といわざるをえない。著作集は高度な学問性を目指すように見えるが、それならば「不敬な」ストレイチーはむしろ黙殺すればよいだろうし、じっさい彼はしばしばそういう処遇

を受けてきたのである。

けれども見方を変えれば、この事実は、ストレイチーが意図したヴィクトリア朝批判の毒が、今日もなお薄められていないことを示すものでもある。ナイティンゲールの信仰面をも重視しようと思図する著作集にとつて、またそこに具現するであろうナイティンゲール像にとつて、おそらくストレイチーの高名な伝記には警戒的にならざるをえないのであろう。

だが、当面この著作集を含む最近の研究動向にはこれ以上立ち入らず、われわれの関心はストレイチーの描いたフロレンス・ナイティンゲール像であることを、もう一度確認しておきたい。

二 悪魔の取り馮き方

「一般の人々がフロレンス・ナイティンゲールをどのように考えているかは誰でも知っている」という言葉でストレイチーの伝記は始まる。最初に通俗的なイメージを引き合いに出して、つぎにそれを覆してみせる。それが「デイバンキング」の伝記作者ストレイチーの方法として理解されている手続きであろう。じつさい、冒頭のパラグラフに関するかぎり、ナイティンゲール伝は予想された手続きにしたがつて進むように見える。右に続く一節を引用しよう（以下引用は「オクスフォード版世界の古典」叢書のテキストを訳して引用し、括弧内に該当ページを記す）。

聖女のごとき自己犠牲に徹した女性、病んだ人々を救うために安楽な生活の楽しみを放棄した、身分の高い繊細な乙女。スキュタリの陸軍病院の身の毛がよだつ惨状の間を滑るように歩みながら、瀕死の兵士の寢床を自らの善意の輝きで聖化した、灯火を手にした貴婦人。そ

れがだれもが知る彼女である。

けれども、真実はそうではなかった。現実のミス・ナイティンゲールは、安直な空想が描き出したような女性ではなかった。（九七）

ナイティンゲールを献身へと駆り立てた衝動はまったく異なっていて、彼女には「悪魔が取り馮いていたのだ（A Demon possessed her.）」とストレイチーは言う。

彼女に「悪魔」が取り馮いていたという矯激な発想と表現は、二〇世紀の初頭の読者を驚かせるに十分であったにちがいない。反発も相当に強かつたであろう。しかしながら読者のなかには、このような発想をそれほど意外とは思わなかった人も少なくなかったかもしれない。ナイティンゲール伝は『ヴィクトリア朝の偉人たち』のなかで、二番目に置かれている。最初にマニング枢機卿、つぎがナイティンゲールである。ストレイチーが聖職者の仮面を剥いで野心家を暴露する手つきを見てきた読者は、「悪魔」の登場をも多少予期していたかもしれない。

だが、これだけでストレイチーは彼の手の内をさらけ出したのだろうか。読者はそれを読み取ったと判断できるのであるだろうか。少なくとも話はそれほど単純ではないようである。「聖女のごとき自己犠牲に徹した女性」、「ランプを手にした貴婦人」という像が通俗的であるとすれば、そのかわりに、クリミヤでのナイティンゲールをストレイチーはどうかこうとしているのか。何よりも、われわれは、彼が言う悪魔の「取り馮き」方をしっかりと見定める必要がある。

けれども、その前に、ナイティンゲールの前半生、誕生からクリミヤ戦争従軍までの彼女をストレイチーの伝記によって辿っておかねばならない。

三 クリミヤまで

きわめて裕福な家庭で、この上なく恵まれた環境で何不自由なく育てられたフロレンスは、幼いときから、健全な子供らしい遊びには見向きもしないが、その代わり、引き裂かれた人形を繕って直したり、傷ついたりした子犬を手当してやることには、病的なまでに関心を持つ子供であったという。だが、彼女はやがて神のお告げを聞いて、看護婦として身を立てる決意をするに至る。フロレンスは、姉や従姉妹と同じように、ヴィクトリア朝的な幸福な結婚を目指すにふさわしい、あらゆる資格を十二分に備えている女性であった。にもかかわらず、男性には関心を示すことがなかった。そのような彼女が、かわりに志向した看護婦という仕事だが、この時代には良家の子女にとって、いかに不適切で異常な選択であったかを伝記は強調する。娘の奇異で頑なな選択に狼狽する両親、両親の猛反対にあつて病的な憂鬱に落ち込むフロレンス、だが彼女は、この辛い試練に打ち勝つて、家族の気がつかぬうちに着々と看護の道への訓練を積み、大陸への家族との旅行中にも各国の都市の病院や施設を見学し経験を蓄える。その様子をストレイチーは的確に述べてゆく。

けれどもなによりも困難な、「もう一つの試練が彼女を待ち受けていた」(二〇〇)。フロレンスがただ一度、心を動かされた男性がいた。彼女の求愛にたいし、この時ばかりは、若い女性らしく彼女は激しく懊悩する。フロレンスの揺れ動く心を、ストレイチーは日記からの引用を交えて克明に詳細に追っている。この伝記で、ナイティンゲールの誕生からクリミヤに出発するまで三十四年の前半生を、ストレイチーはきわめて簡潔に、約一八〇〇語で一氣に語り終えてしまっている。ところが、そのうちで、この男性にたいする彼女の愛と苦悩については、一八〇〇語の四分の一に相当する四五〇語を費やして語っている。

この伝記全体の中でナイティンゲールの内面が詳述されるのは、この場面だけである。事件は、単なる青春のロマンティックな挿話ではない。もし彼女がここで結婚に踏み切っていたら、われわれが知るナイティンゲールは存在しなかった。その意味でストレイチーがこの愛を彼女の生涯の「危機」としてとらえ、重視したのは明らかに正当であった。

しかしながら、この記述には奇異な点がある。彼女の求婚者は名前さえ記されていないのである。今日、「世界の古典」叢書のテクストは、それがリチャード・ミルンズであることを注記するが、それ以上は語っていない(二七二)。後述する別の伝記によれば、彼は、ケンブリッジ大学の使徒会に属し、会員の間では同性愛者として知られていたという。またサディズム・マゾヒズム関係の文献では欧州随一の収集家であった。特異な人物であるだけに、ストレイチーの沈黙は重い。だが、当面は彼の気掛かりな沈黙に留意するだけにとどめよう。

結局フロレンスは求婚者を退け、自らの使命への道を貫徹する。最近の伝記によれば、娘の結婚に希望をもっていた母親は(中産階級の女性の嗜みをかなぐり捨て)ロンドンの「魚売り女のように」^⑥ヒステリックに喚き続け、父親も母親以上に衝撃をうけたという。やがて三年の歳月が過ぎて、ナイティンゲール家の人々がフロレンスに譲歩し、彼女は一流医の街として知られるハーリー街で看護の実習を積むことになる。アヒルである自分たちが白鳥を生んでしまった、という彼女の母親の嘆きをストレイチーは伝えている。

「哀れな母親は間違っていた。卵から孵化したのは、白鳥ではなくて、鷺だったのだ」(二〇一)という言葉でストレイチーは第一章を終え、第二章はクリミヤ戦争でのナイティンゲールを描くことになる。この鷺が空高く飛翔することを夢見て羽ばたきつつ、まさに巣立ちの準備を完了した時に、「運命が戸を叩き、クリミヤ戦争が始まった」のであった。

四 クリミヤのナイティンゲール

クリミヤ戦争の勃発（一八五四年）で始まる第二章は、戦争が終結しナイティンゲールが帰国する一八五六年まで二年間を扱っている。クリミヤ行きまでのナイティンゲールの前半生三四年間を「世界の古典」叢書版のテクスト四ページ半（約一八〇〇語）に簡潔に纏めたストレイチーは、クリミヤ二年間に関しては、同じテクストで三倍以上の一五ペーシ強を費やしている。

ナポレオン戦争の英雄ウエリントン公爵が最近まで君臨し続けた光輝あるイギリス陸軍は、近代戦を戦うにはすでに万事にわたってあまりにも老朽化・硬直化していた。このような軍隊に、本来ならナイティンゲールを受け入れる余地はありえなかった。

だが、信じ難いほど幸運なことに、この戦いで、彼女のような存在が前線では何よりも必要であることをこの上なく理解していた、彼女の親友シドニー・ハーバートが陸軍省で指導的な立場に座っていた。

ストレイチーは、開戦直後に、彼女の奉仕を依頼するハーバートの手紙と、その提供を申し出るナイティンゲールの手紙が郵便ですれ違うほど、二人の呼吸があつていた様子を強調している。

ナイティンゲールの一団が、コンスタンチノープル郊外、ボスフォラス海峡のアジア側にあるスキュタリに到着する直前の、戦線の惨状をストレイチーは克明に記している。現地では、開戦後まもなく行われた相次ぐ激戦によって傷病兵が充満し、すでに絶望的な状況が現出していた（以下の三つの長い引用文は、すべて「世界の古典」叢書版のテクストの、一〇四から一〇五ページによる）。

兵士たちはクリミヤ半島の小さな病院で応急的な処置を施されたあ

四

とで、二〇〇人一束 (Batach) にして船に乗せられ黒海を横切つてスキュタリに来るのだった。これは通常時は四日半の旅程だった。だが、最早そうではないから、輸送には二週間ないし三週間かかることも多かった。「奴隷航路」と呼ばれたのも不思議ではなかった。群れをなす傷病兵は、ときには甲板上にさえ放置された。手足切断の荒療治を受けたばかりの者、熱病・凍傷に苦しむ者、赤痢、コレラの末期症状の者が一緒だった。彼らには、ベッドどころか、ときには毛布も、いや衣服さえない者がいた。

ほとんど看護を期待できないまま運ばれる傷病兵たちの死亡率は、「千名に七四名」。遺体は海に投げられる。「かれらが最も不運であったとは誰が言えよう？」なぜなら、荒天時には接岸不可能になる船着き場から上陸し、病院までかなりの距離の急坂を難渋して上り、病院にたどり着いても、そこに「口を開けているのは、地獄だった」。

急遽、病院に改造転用されることになった、巨大な兵舎に存在するのは、あらゆる形態と強度の「欠乏・怠慢・混乱・悲惨 (want, neglect, confusion, misery)」だった。

建物自体に根本的な欠陥があつた。その下を下水管が通り、汚物一杯の水溜が上の病室に毒気を送っていた。床は擦って掃除することができないほど至るところで腐っていた。壁には汚れが分厚く付着し、信じがたいほどの毒虫の大群が至るところに群めいていた。

換気装置のない病院には、ヨーロッパのほとんどの大都市の最悪の貧民街を知っているナイティンゲールに、これと比較できるものは経験したことがないと云わせるほどの衛生状態で、悪臭が立ち込めていた。

ここでストレイチーは、この劣悪な病院で患者たちに必要な最低限の日用品も、まったく欠けていることを、ひとつひとつ数え上げてゆく。ベッドの台数自体の不足、負傷兵が痛がって忌避する粗悪なシーツ。さらに、

寝室用の家具は皆無で、ビールの空き瓶が燭台のかわりに使われている有り様だった。洗面器、タオル、ソープ、箒、雑巾、盆、皿、どれ一つ無い。スリッパ、ハサミ、靴ブラシ、靴墨、どれもこれも無い。ナイフ、フォーク、スプーン、みんな無かった。

ストレイチーは引用のなかの名詞のすべてに、ひとつひとつ丹念に否定の形容詞やその他の否定語を繰り返して添えている。スキュタリの病院の状況は、劣悪というよりもおよそ病院の体を成していなかったのである。

それにしても、ここまで卑俗な日用品に執拗なほど密着して列挙する文体は、それなりに修辭的とはいえ、ストレイチーの文章で外に見られない。少なくともここで彼は、ブルームズベリ派の意識によつてではなく、看護の現場で習練を積み、鍛えられた過つことのない眼をもつて従軍しているナイティンゲールの眼差しで惨状を追っているのである。

じつさい、少なくともクリミヤの戦線でのナイティンゲールを描くこの章では、ストレイチーの文体は都会的な優美な達成を目指してはいない。しかし、彼の研ぎ澄まされた言語意識は、たとえば、戦場における兵と将との日常的な些細な姿を描く際にも鋭く發揮される。

ナイティンゲールの病院での獅子奮迅とも云うべき献身的な働きといかにも対照的に、高官たちは、彼女の「ナイティンゲール」という名前が「小鳥」(二〇七)を意味することを子供じみたジョークの種にして面

白がり、それだけ自分たちの無為無策無能ぶりを上塗りしてしまう。

反対に、兵士たちはナイティンゲールの活躍に心酔しきつて彼女を人格化さえするに至っている。彼らは、彼女の存在によって、以前には当たり前だった口汚い言葉遣いが自ずと改まってきたことを自覚しているのだが、ストレイチーはその自覚ぶりを語頭の「エイチ」を落とすロンドン訛りで彼らの口から言わせている。

ストレイチーは、イギリス陸軍のすみずみまで行き渡っている「階級意識」に殊更に言及してはいないが、「女が戦争となんのかわりがあるのか」という抜き難い偏見に支配されている高官たちと、兵士たちの間には、ナイティンゲールの評価をめぐって決定的な相違が存在することを、リアルに繰り返し描いている。

このように、戦場のナイティンゲールの活動は、敵意と疑念と無理解に取り囲まれた彼女が、それらを一つ一つ克服してゆく物語でもある。

「わたしは、目下イギリス陸軍全体に衣服を着せているところです」(二〇九)とシドニー・ハーバートに書き送ったように、兵士たちの食事の改善のつぎには、日常の衣服の問題の処理が待ち構えていた。だからこそ、「看護という務めは、自分が強いられている職務のうちで、最も重要でないもの」(二一〇)とナイティンゲール自身が告白しなければならなかった。戦場での兵站に関する全部門が彼女の指示を必要としていたのだ。こうして、われわれはすでに、「ランプを手にした貴婦人」の上品な取り澄ました像から遠く離れた所まで来てしまっている。

第二章は、戦争が終わり、帰国したナイティンゲールにたいする女王の労いの言葉と品の記述で区切りがつけられる。だが、それよりも注目すべきであるが、これまで見逃されてきたことに言及せねばならない。

ナイティンゲールの努力により、戦争の後期には、患者たちの死亡率は、かつての四二パーセントという高率から、千人につき二二人にまで

ドラマティックに低下していた。これは当然期待されたことであった。だが、別の予期されなかった驚くべき変化が兵士たちのあいだに起こっていた。彼らは、飲酒の量が減り、(ストレイチーは信じ難いことに思えるが、と注釈をつけている「二一四」) 給料を貯金するようになったのだ。

ナイティンゲールが着任して間もなく彼女の配慮によって、兵士たちがタオルや石鹸、歯ブラシなどの日用品を使うことを「エンジョイ」(二〇七) するようになったことをストレイチーは記していた。イギリス陸軍のさまざまな面での制度的改革以上に、こうして卑近なところから始まった兵士の人間化は、彼らが貯蓄意識に目覚め、未来に備えるところまで進んだのであった。

ストレイチーの機知と、ときに見られるシニズムを、軽薄と評するのはたやすい。だが第二章でわれわれが見てきたストレイチーは、辛辣な筆遣いを見せつつも、地獄の戦場を的確に描写する文学者・伝記作者である。

ストレイチーはここでは、なによりも、ナイティンゲールが戦場で本領を發揮する姿を見事に描き、それと併せて、大英帝国陸軍の深刻な腐敗を鋭く抉りだしながら、さらに、下層の兵たちの生きざまにも、暖かい目を向けることを忘れなかった。

つねに死の影に脅えつつ、戦場の消耗品視された一九世紀の兵士たちが、そこから何とか脱却しようともがく様を注視するのを彼は忘れなかった。けれども、それは少しも意外ではない。

ストレイチーは良心的徴兵忌避者であった。審判の場で彼が、もしドイツ兵があなたの姉妹をレイプしようとしたらどう行動するかと問いかけられ、「二人の間に割って入ろうとする」と答えたという有名なエピソードが起こったのは、一九一六年、『ヴィクトリア朝の偉人たち』出版の二年前のことであった。この切実な体験を経て、大戦下に書かれた

伝記において、ストレイチーは決して傍観者の目でクリミヤの悲劇を見ていたのではなかった。(当然だが、本稿「付記」の問題と繋がる、眼前に剥出しになったであろう兵士の性の実態は一切語られない)。

五 ストレイチーの戦略

クリミヤ戦争までのナイティンゲールを見たところで、ストレイチーの彼女に関する記述が『ヴィクトリア朝の偉人たち』に収められた四人の伝記のなかで、少なくとも三点の顕著な特徴をもっていることに注目しておきたい。

一つは、五つの章に区分されていることである。ここには、明らかにストレイチーが、ナイティンゲールの生涯を五幕の劇のように、めりはりを付けて語ろうと意図していることが読み取れるであろう。

他の三人について云えば、最初のマニング枢機卿の場合は一〇の章に分けられている。だが、マニングの経歴は彼の性格の一貫した強さを特徴とする、とストレイチーは最初に明言しているので、ナイティンゲールとは異なった手法で語ろうとしていることは明白である。

あとの二人、アーノルド博士とゴードン將軍の伝記では、区分は施さず、一続きの記述になっている。本稿ではこの点に留意してみてゆくことにしたい。

二つ目は、伝記でありながらナイティンゲールの生涯は、ほとんど明確な年代を記さずに語られることである。誕生の年も、死去の年も記されない。またストレイチーが彼女の企図する改革のパートナーとして特に重視するシドニー・ハーバートの死の年も記されない。

例えば最初のマニング伝は、この点で全く異なっている。この伝記は、「ヘンリー・エドワード・マニングは一八〇七年に生まれ、一八九二年に

「死去した」と始まるのであるから。

ナイティンゲール伝の場合は、年代は、また彼女の年齢は、おそらくストレイチーの戦略にしたがって、ところどころに挿入されている。

たとえば、彼女がメリット勲章を授与されたのが「死の三年前、八七歳の時」(二四二)であった、と記されるように(この場合には、年齢のすぐ後に、括弧つきで一九〇七年という年代も添えられている)。女性ではヴィクトリア女王に次ぐ著名人であったナイティンゲールにたいし、国家の榮譽がいかに遅く授けられたか、遅すぎてもおかしくない時期になつてから授けられたことが、証明されるのである。

三つ目は、すでに見たように、ナイティンゲールという人物は「悪魔に馮かれていた」と、その特徴を冒頭で宣言していることである。マニングにおいても、冒頭の一節で彼の生涯を集約的に述べようとする姿勢は見える。しかしそれは、少なくともその限りでは概して穏当な記述に終始している。したがって、いきなり聖女のイメージを覆そうとするかのような、ナイティンゲールの場合とはまったく異なっている。

もうひとつ、付け加えておくべきことがある。これまで、なぜこの四人が選ばれたかについての議論はあつた。だが、選ばれた四人がヴィクトリア朝人であることに關しては当然視されてきた(もともと一八世紀末に生まれ、一八四二年に死去したアーノルドについては、いささか疑念が表明されたことはあつたが)。マニングとゴードンは一九世紀の八〇年代から九〇年代に死去している。ところが、ナイティンゲールの死は一九一〇年、『ヴィクトリア朝の偉人たち』が出版されたのはそれから一〇年も経っていないかつた。他の三人と異なり、読者にとつて聖女ナイティンゲールの死の記憶がまだ生々しいうちに、ストレイチーはその記憶を書き改めようと試みたのである。

〔付記〕

本稿は未完であり、注は次稿の最後ににまとめて付けたい。

ここでは、本文で言及したナイティンゲールへの求婚者ミルンズについて、もう少し補足しておくことにする。

最近、ミルンズにつき注目すべき情報を提供しているのが、本稿の冒頭で言及したジリアン・ギルによるナイティンゲール伝である。

じつは、文学者ではないにもかかわらず、ミルンズの名は文学研究の世界に、かなり以前から登場していた。彼は、サド・マゾヒズム関係文献のコレクターであるとともに、詩人アルジャン・スウィンバーンの友人であつた。彼の膨大な収集を見せられた詩人は、ヨーロッパ中でも類のないコレクションだろうと、狂喜してダンテ・ガブリエル・ロゼッティに書き送つたという。これらのことが報告されているのは、マリオ・プラーツの名著『ロマン主義文学における肉体と死と悪魔』である。彼はミルンズを「悪意あるメフィストフェレス」と呼び、また、怪しい文献の宝庫である自分の書庫に詩人を連れ込むミルンズを、地獄界にダンテを案内するヴェルギリウスに譬えている。

この研究を踏まえつつ、ナイティンゲール伝のなかでジリアン・ギルは求愛者について述べている。量質ともに驚くべき偏執的なコレクションにもかかわらず、彼はきわめてまっとうなヴィクトリア朝の紳士に見えたらしい。「だが」と伝記作者ジルは云う、「フロレンスの求婚者としてはグロテスクな男である」。

じつさいグロテスクではあろう。ナイティンゲールの傑出した博愛心と、ミルンズの暗く偏執的な性愛とはどう溶け合うだろうか。だが、両者の間でかなりの期間にわたって、愛の儀式が進行し、結婚が現実の問題として真剣に考えられたのである。

ジルはさらに、もしナイティンゲールがミルンズとの結婚に踏み切

つていたらどうであったかという仮定の話にまで立ち入っている。けれども、ここでそれを紹介する必要はないであろう。それよりも、ここで大切なことはストレイチーの態度である。おそらく彼はそれほど詮索するまでもなく、求愛した青年の正体を知っていたであろう。

にもかかわらず、彼女の深刻な悩みにかなりのスペースを割きながら、青年の名を明かすことはしなかった。ミルンズも使徒会のメンバーであった。ナイティンゲールの伝記を準備するにあたって、ミルンズに関する情報はたつぷりファイルされていたであろう。だが彼は結社に忠実であったのか、先輩について沈黙を守り、彼女の内面にだけ記述を限定したのであった。

もう少しこの点にかかわることを述べるならば、ストレイチーの同性愛に関する詳細な叙述で知られる、彼の伝記作者ホルロイドも、ミルンズについては、またストレイチーが沈黙したことについても、何も述べてはいない。「グロテスク」な可能性を秘めたまま終わった、愛と苦悩の物語はこれだけである。だが、彼の名を明かさずにそれを語ったストレイチーにとって、この青年の影をここでちらつかせたことは、一つの伏線であったかもしれない。少なくとも、彼の周辺の読者層にとつて、「恋人」の正体は知られていたであろうから。

また、ナイティンゲールの方は、ミルンズとの結婚を考えたとき、もちろん深窓の佳人ではなく、看護実習の間にさまざまな男たちとの接触があったであろうし、ヴィクトリア朝の男たちのセクシュアリティについて全く無知であったとは思われない。もしそうなら、ミルンズに関する何も気が付かなかったのだらうか。それにしても前述のように、クリミアの野戦病院という、兵にとつて「地獄」であり快楽の園にもなりうる場で、彼女がどう身を処したかは求婚者の問題と無縁ではない。

ナイティンゲールの別の伝記作者ウーダム・ミスが伝えているミルンズの姿は、あくまでも立派な紳士、しかも温和な紳士である。伝記作者はそれをナイティンゲール自身を含む知人たちの言葉によって実証しようとしている（例えば、ナイティンゲールが初めて紹介されたとき、ヨークシャーの大きな荘園の相続人で三三歳であったミルンズは、「ロンドンの社交界で輝かしい成功を収め、政界においても出世が約束されていた」と、ウーダム・ミスは述べている）。

本稿が目的とするのは、ストレイチーのナイティンゲール伝における筆遣いであつて、ミルンズの人物ではないが、ストレイチーのナイティンゲールを明らかにするために、ミルンズに関する証言をなお少し紹介しておきたい。ウーダム・ミスはミルンズの文学的才能について、「ミルンズは自らも優れた詩を書いたが、それ以上に詩人の天分を見抜く才能に長けていた。一八四八年、彼はキーツ詩集の初版本を責任編集している。イタリアで育った彼には、その風貌や挙措動作にイタリア絵画のような美しさが備わっていた」と述べている。

最後に、これも同じ伝記（武山・小南訳）が引用しているのだが、カーライルのエマソン宛の手紙を紹介しておこう。男性に関する人物描写としては奇妙なほど細かく好意的である。「この男はとても物柔らかで、微笑みを絶やさず、ちよつとからかい好きで、また情愛細やかで、育ちがよくてイタリア人風に小柄で、髪はオリブ色がかった長い金髪、えくぼがあつて顎が短く、あらたまつた場で挨拶するのに相手の首に腕を巻き付けてする、そんな男だ」と想像ください。」

（本学名誉教授）